

【授業科目】病理検査学

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
澤田 浩秀	1年次 後期	必修	2	30	講義	あり	巻末掲載	可
授業概要 (内容と進め方)	<p>病理検査とは、疾患の最終診断を下すとともにその病変の広がりなどを確かめるために必要な検査である。疾患の診断および治療を目的に、生検、手術などで採取された臓器、組織、細胞などの検体を扱い、これらの検体を適切な処理をするとともに標本を作製するものである。本科目を理解するには、解剖組織学、病理学に加え、診断に至るに必要な幅広い知識の修得が必要である。本科目では、病理学で学んだ知識を基に、循環器系、呼吸器系、消化器系、神経系等各系統別に関連する疾患の病理学的概要を学習する。さらに、固定、包埋、薄切といった病理組織標本の作製の基礎から、HE染色、特別染色、免疫組織化学染色などを中心に学習し、医療現場で行われる実践的な検査法について学ぶ。*実務経験を持つ教員が授業を進める。</p>							
授業の位置づけ	<p>本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる」、</p> <p>④「幅広い視野で臨床検査を考え、ヘルスケアシステムにおける臨床検査の専門性を理解し、保健・医療・福祉の専門職と連携し、地域社会に貢献できる」、および</p> <p>⑤「将来に向け臨床検査を主体的に学び、臨床検査の専門職としてのキャリアを伸ばせる能力を持つことができる」の達成に寄与している。</p>							
到達目標 (履修者が到達すべき目標)	<ul style="list-style-type: none"> 細胞組織の障害と修復、代謝異常、循環障害、炎症、免疫異常、腫瘍など病理学総論としての内容が理解できている。 病理組織標本作成法として、固定、包埋、薄切、HE染色、特別染色、免疫組織化学などの内容が理解できている。 細胞診の概要が理解できている。 							
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	<ul style="list-style-type: none"> 本科目は、解剖組織学、生理学などの基礎医学科目と臨床病態学などの臨床医学科目との橋渡しの科目であり、内容が理解できていないと臨床医学科目の理解も不十分になり得る。 各疾患に関して十分な授業時間が得られないため、各自で教科書、プリントをよく読んでおく。 1回の講義につき、60分程度の予習および180分程度の復習を行うこと。 <p>※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（2単位15回科目の場合：予習+復習4時間/1回）（1単位15回科目の場合：予習+復習1時間/1回）（1単位8回科目の場合：予習+復習4時間/1回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。</p>							
授業計画	<p>第1回 病理学とその歴史、病理学の医療への役割</p> <p>第2回 細胞組織の障害と修復（変性、細胞死、萎縮、化生、再生、過形成）</p> <p>第3回 代謝異常（糖質代謝、脂質代謝、タンパク質代謝）</p> <p>第4回 循環障害（局所循環障害、全身循環障害）</p> <p>第5回 炎症（炎症の定義、機序、急性炎症、慢性炎症）</p> <p>第6回 感染症（感染の成立、感染防御）</p> <p>第7回 免疫異常（アレルギー、免疫不全、自己免疫疾患）</p> <p>第8回 腫瘍（腫瘍の定義、分類、原因、発生）</p> <p>第9回 腫瘍（良性腫瘍、悪性腫瘍、代表的腫瘍）</p> <p>第10回 染色体異常、遺伝性疾患</p> <p>第11回 病理組織標本作成法（固定、脱灰、包埋、薄切、凍結切片作成）</p> <p>第12回 病理組織標本作成法（HE染色、特別染色）</p> <p>第13回 病理組織標本作成法（免疫組織化学、酵素組織化学）、病理解剖</p> <p>第14回 細胞診断概論</p> <p>第15回 まとめ</p>						全て 澤田	
評価方法 評価基準	<p>成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。</p> <p>10% 授業態度 90% 学期末試験</p>							
教科書	<p>新訂版 クイックマスター病理学 第2版 堤寛著（サイオ出版）</p> <p>最新臨床検査学講座 病理学・病理検査学 松原修著（医歯薬出版）</p> <p>※1年前学期「病理学」で使用したものと同一</p>			参考書等		<p>標準病理学 第6版（医学書院）</p> <p>ロビンス基礎病理学 原書10版（丸善出版）</p>		
学生へのメッセージ	<ul style="list-style-type: none"> 病理検査学の学習範囲は広範であるため、教科書、プリント以外にも図書館蔵書を参考書として十分な学習を心がけていただきたい。 病理標本として用いられる検体は、生検、手術など侵襲的な手法によって得られることが多いため、特に注意深く慎重に行われる検査であることを認識いただきたい。 							